The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞島津忠夫・大村敦子編著『甲子庵文庫蔵　紹巴富士見道記　影印・翻刻・研究』
Author(s)	寺田, 伝
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 180-180
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70995
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

島津忠夫・大村敦子編著『甲子庵文庫蔵紹巴富士見道記影印・翻刻・研究』

寺田　伝

『紹巴富士見道記』は、室町後期に活躍した連歌師の里村紹巴が、永禄十年（一五六七）に京都から駿河へと富士見物のために出立し、同年八月に帰京するまでの出来事をまとめた紀行文である。道中では、連歌を愛好する人々と交流し、時に、『伊勢物語』の「東下り」に自身を重ねあわせ、また時に、一揆を鎮圧する信長軍に遭遇する等、多岐にわたって興味深い内容を有している。

近年の研究として、内藤佐登子氏（『紹巴富士見道記の世界』続群書類従完成会、平成十四年）や、岸田依子氏（『中世日記紀行文学全評釈集成 第七巻』勉誠出版、平成十六年）のものが知られ、『紹巴富士見道記』は、同時代の先達亡き後の紹巴にとって、連歌師の第一人者たる自覚と自立を象徴する旅の記録であり、また、かつて同じく旅情を描いた宗祇・宗長、そして後に宗因へと継承される連歌師の紀行文学として位置づけられている。

しかしながら、従来の研究は、時代の下った誤りの多い伝本を底本として行われてきた。それゆえ意味の通らない本文もあり、善本の出現が期待されていたが、平成十七年、古今集成立一一〇〇年記念シンポジウムの資料展示に、甲子庵文庫所蔵の『紹巴富士見道記』が「紹巴自筆」として紹介され、公に知られる事となった。

本書は、その甲子庵文庫本の影印であり、本学で長らく教鞭を執られた故・島津忠夫氏と、大村敦子氏とによる翻刻・研究篇が付されている。先に「紹巴自筆」としたように旧蔵者である濱千代清氏は、該本を紹巴自筆と考えていたが、島津氏は、その筆跡が途中から乱れてくるなど不審な点もみられることから後に慎重を期して、自筆本の「実にていねいな転写本」とする。いずれにせよ、この甲子庵文庫本が『紹巴富士見道記』の根本資料であることは、研究篇以下で詳述される通り、もはや言を俟たない。

まず、「本文校合箚記」では、従来の諸伝本のほか、甲子庵文庫本につぐ善本と目される、京都女子大学本を校異に加えて、現存諸本の中でも甲子庵文庫本が根本資料として最も相応しいことを、実例を掲げて明らかにする。つづく、「本文の崩れゆく過程」は、先の「本文校合箚記」をより丹念に述べ、転写が繰り返されるなかで異文が生じてゆく諸相を具体的に論証したもの。

研究篇でしばしば言及されるように、今後『紹巴富士見道記』は本書が影印する甲子庵文庫本によって再読される必要があり、また、自筆本／転写本といった点も広く検証されるべきであろう。

最後にではあるが、中世文学にとどまらず、上代から現代短歌にいたるまで幅広く日本文学を研究され、今年四月に逝去された島津忠夫氏に、心より哀悼の意を表したい。

（和泉書院、二〇一六年六月、一三二頁、四，八〇〇円＋税）

（てらだ・つたう　本学大学院博士後期課程）